

<論文>

多次元共感性尺度(MES)10項目短縮版の検討¹

木野和代²
鈴木有美

問題と目的

共感性は、他者理解を深め、円滑な対人関係の基礎となるものであり、援助行動をはじめとする向社会的行動を動機づけたり (e.g., Eisenberg & Miller, 1987)、攻撃行動を含む反社会的行動を抑制したり (e.g., Miller & Eisenberg, 1988) する重要な要因として研究されてきた。従来の共感性の概念定義には、他者の心理状態を正確に理解する点に重きをおく認知的定義と、他者の心理状態に対する代理的な情動反応を強調する情動的定義が存在していた。そして、性格特性としての共感性を測定する指標としては、それぞれの定義に基づくものが開発されてきた。

しかし近年では認知的側面と情動的側面の両側面を統合し、多次元的な構造で捉える見方が定着している (レビューは Davis, 1994 菊池訳 1999; Eisenberg & Strayer, 1987 参照)。そして多面的・多次元的なアプローチをとる指標としては、対人反応性指標 (Interpersonal Reactivity Index: IRI; Davis, 1980, 1983) が開発されている。

IRIは、自発的に他者の心理的観点をとらうとする傾向を表す「視点取得 (Perspective Taking: PT)」、架空の人物の感情や行動に自身を投影して想像する傾向を表す「想像性 (Fantasy: FS)」、他者に対する同情や配慮など他者指向的な感情に関する「共感的配慮 (Empathic Concern: EC)」、他者の苦しむ場面における不安や不快など自己指向的な感情に関する「個人的苦痛 (Personal Distress: PD)」の4下位尺度から構成される。本邦においても、桜井 (1988)、菊池 (Davis, 1994 菊池訳 1999)、明田 (1999) らによって邦訳版が作成され、広く活用されている。

しかし、鈴木・木野 (2008) はIRIについていくつかの問題点を指摘している。IRIの問題点としては主にPD尺度とFS尺度にかかわることが挙げられている。PD尺度については応答的所産 (観察他者の感情をそのまま再生する (= 並行的所産) というよりも、他者の感情に対

¹ 本研究は、日本教育心理学会第57回総会での発表 (発表者: 木野・鈴木) を踏まえ、当日いただいたコメント等を考慮して執筆したものである。JSPS 科研費 (課題番号 JP26380943) の助成を受けた。

² 本稿は主として第一著者が執筆したものであるが、MES10項目短縮版の項目選定は著者2名の協議によるものであり、また、鈴木・木野 (2008) の論文で用いたデータを使用して分析した結果を著者2名で検討した。

応じた感情反応の経験)における自己指向的反応を測定しているとはいいがたい点、他者の苦痛に対する反応傾向の測定に限定されている点などが指摘されている。FS尺度については、位置づけが明確ではないことが問題視されている。

これらの問題点を克服し、より有用性の高い指標の開発を試みたのが、多次元共感性尺度(Multidimensional Empathy Scale: MES; 鈴木・木野, 2008)である。MESは、共感性の情動的所産と認知的過程の生起に関わる個人傾性を測定するものであり、認知・情動の次元に加え、他者指向性-自己指向性という指向性の弁別に焦点をあてている点に特徴がある。また、上述のPD尺度の問題点への対応の一環として、応答的所産とは別に並行的所産を測定するために「被影響性」という下位概念が追加されている。信頼性・妥当性以外にも利便性を考慮し、鈴木・木野・出口・遠山・出口・伊田・大谷・谷口・野田(2000)による54項目版から複数回にわたる検討を経て、鈴木・木野(2008)において「他者指向的反応(5項目)」「自己指向的反応(4項目)」「被影響性(5項目)」「視点取得(5項目)」「想像性(5項目)」の5下位尺度、計24項目からなる尺度が提案された(下位概念間の関係については表1参照)。MESは、個人特性としての共感性を多面的に理解する上で有用と考えられ、以後の研究でも活用されている(e.g., 木野・鈴木・内田, 2011; 三木, 2015; 杉山・比嘉・田中・山田, 2015; 鈴木・木野, 2015)。

先述のように、共感性は社会的行動の背景要因として重要視されるが、主に対人援助職を中心として職業場面においても共感性が求められることがある。例えば、看護師(e.g., 加藤・沢下瀬・山下・雑賀・吉岡, 2013)や介護士(e.g., 西村・村上・櫻井, 2015)、保育者(e.g., 秋政・中山・伊藤, 2009; 藤村, 2010; 三木, 2015)などである。そしてこれらの職業に携わる人材を養成する教育課程ではさらに、共感性の育成について論じられることもある。

他方で、高すぎる共感性が共感疲労を招く危険性も問題視されており、保育者の共感性については、この点に着目した検討がMESを用いた研究でなされている(e.g., 木野他, 2011; 鈴木・木野・内田, 2011; 内田・木野・鈴木, 2014; 木野・内田・鈴木, 2015; 内田, 2016)。鈴木他(2011)から内田他(2014)までの一連の研究においては、保育者養成課程に在籍する女子大学生の共感性について、1年次、3年次実習前・後、卒業時というように追跡調査が行われてきた。そしてその後も、就職後までの追跡調査が試みられているが(e.g., 内田, 2016)、このような各地に散らばる対象者を長期的に追跡するためには、近年頻繁に利用されるようになってきた

表1 MES下位尺度の位置づけ(鈴木・木野(2008)をもとに作成)

		情動面	
		並行的所産	応答的所産
他者指向性	視点取得 [5]	被影響性 [5]	他者指向的反応 [5]
自己指向性	想像性 [5]		自己指向的反応 [4]

[] 内は項目数

WEB調査の導入も有効と考えられる。ただしWEB調査により回答を求めるに際しては、画面や回答時の状況の制約等を考えると、より少ない項目で、ある程度の精度を備えた尺度が望まれる。また、共感性育成のためのプログラムの実施や効果測定に際しても、複数回回答する参加者の負担を考慮し、さらに、結果の自己評価や即時フィードバックを簡便に行えるような尺度の提案が望まれる。そこで本研究では、各下位尺度について2項目ずつ計10項目で構成される短縮版を提案し、その利用可能性について検討することとした。

近年、短縮版尺度は様々な概念の測定のために作成されており、その作成方法も多様である。短縮版尺度作成の方法に関しては、石井（2014）が、測定する構成概念の幅が狭いものになりすぎる可能性について警鐘を鳴らしている。具体的には、①項目数が少なくなれば、たずねる内容が削減されるため、測定する構成概念が狭いものになるため、パスモデルが適合すること（だけ）をもって短縮版尺度が作成されたとする問題、②信頼性に関しても少数項目で信頼性が高いとすれば、それだけ測定対象が狭小のものであることを示唆するが、因子負荷が大きい項目を優先的に抽出して短縮版を作成するとこのようなことが起こりやすいこと、を指摘している。そこで、MES10項目短縮版に含める項目を選定するにあたっては、後述のように、内容の妥当性の観点から構成概念をよりよく代表するかを重視し、構成概念本来の意味を損なわないように配慮することとした。

MES10項目短縮版の信頼性および妥当性確認に際しては、宗田・岡本（2013）を一部参考にし、短縮版として抽出された項目を用いて原版と同様の分析を行い、鈴木・木野（2008）で予想されたような結果が得られるかどうかを、MES原版で得られた結果も参照しながら確認することとした。したがって、妥当性検討に関しては、MES原版と同様に、併存的妥当性を確認するために、IRIおよびMehrabian & Epstein（1972）の情動的共感性尺度（Questionnaire Measure of Emotional Empathy: QMEE）を用いる。さらに、主として他者指向性と自己指向性の弁別や「被影響性」と「自己指向的反応」の相違を確認するために自己意識、自己没入、個人志向性・社会志向性といった自己概念にかかわる側面との関連を検討し、さらに、向社会的行動や攻撃性、社会的スキルといった対人行動と関わる側面、また自尊感情や人格特性を包括的に測定する5因子性格検査との関連も検討する。弁別的妥当性検討のためには社会的望ましさとの関連を検討する。

方法

1. 調査対象者および手続き

鈴木・木野（2008）において収集されたデータを用いた。これは、愛知県内の5つの四年制大学に通う大学生に対して、2003年10月から2006年2月の間に複数回にわたって収集された

ものである。回答者の内、30歳未満の者を分析対象とした。内訳は、第1回目調査174名(男110名,女64名; $M=19.82$ 歳, $SD=1.08$)、第2回目調査210名(男119名,女91名; $M=19.75$ 歳, $SD=.05$)で、このうち141名が両方に回答した³。第3回目調査以降は、順に168名(男79名,女89名; $M=19.67$ 歳, $SD=1.17$)、144名(男45名,女99名; $M=19.05$ 歳, $SD=0.80$)、347名(男138名,女209名; $M=18.87$ 歳, $SD=1.13$)であった。調査用紙は、各自が自宅へ持ち帰って回答し、後日回収された。

2. 調査内容

本論文での分析対象とした測度のみを以下に記載する。(1)は全5回の調査において実施し、(2)~(12)はいずれかの調査において実施した。

(1) MES10項目短縮版およびその項目選定

MES原版については先述のとおり、鈴木・木野(2008)の分析結果にもとづき、最終的に「他者指向的反応」5項目、「自己指向的反応」4項目、「被影響性」5項目、「視点取得」5項目、「想像性」5項目からなる尺度が提案されている(5件法)。MES10項目版の項目の選定に際しては、鈴木・木野(2008)での因子負荷量やI-R相関(表2)等を参考にしつつも、内容的妥当性を重視して測定下位概念の代表性や広がり、項目内容のわかりやすさを基準に、著者2名の協議により行った。ことに、内容的妥当性に関しては、MES原版の項目選定の際の留意事項にも配慮した。すなわち、①応答の所産傾向については、他者の苦痛に限定せず快感情も含めて他者の心理状態に対する反応傾向を測定すること、②他者指向的反応と自己指向的反応を反映する応答の所産傾向を測定すること、③被影響性は自己指向的でも他者指向的でもなく、他者の心理状態に対する素质的な巻き込まれやすさを測定するものであること、④他者指向的な視点取得と自己指向的な想像性を反映する認知傾向を測定すること、に留意した。また、逆転項目も可能な限り採用するように配慮した⁴。以上により、各下位概念について2項目ずつ計10項目を選定した(表2)。

(2) IRI

菊池(Davis, 1994 菊池訳1999)による翻訳版を使用した。「共感的配慮」「個人的苦痛」「視点取得」「想像性」各7項目、5件法。第3回目調査にて実施。

³ 第1回目調査と第2回目調査の実施間隔は6か月であった。

⁴ これらの理由により、各下位尺度で採用した2項目間の相関は、必ずしも高いものばかりではなかった(「他者指向的反応」「自己指向的反応」「被影響性」「視点取得」「想像性」の順に、 $r=.34, .20, -.46, -.18, -.25$; 逆転項目処理前の値)。これらよりも相関が高くなる組み合わせ(例えば、「視点取得」は原版No.4とNo.17で $r=.38$)もあったが、項目内容の類似性の高さ等によるものと考えられた。少数項目での測定に際して内容的妥当性を重視する意義は、小塩・阿部・カトロニ(2012)でも述べられている。ただし、項目間の相関がどのくらいであれば適切かの検討は今後の課題とされている。

表2 MES10項目短縮版選定項目

下位尺度	No.	項目	I-R 相関
他者指向 的反応	20	人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、自分には関係なくても応援したくなる。	.45
	12	悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる。	.54
自己指向 的反応	13	他人の失敗する姿を見ると、自分はそうなりたくないと思う。	.39
	21	他人の成功を見聞きしているうちに、焦りを感じることが多い。	.35
被影響性	2	まわりの人がそうだとすれば、自分もそうだと思えてくる。	.60
	22*	他人の感情に流されてしまうことはない。	.56
視点取得	4	常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている。	.40
	10*	相手を批判するときは、相手の立場を考慮することができない。	.31
想像性	5	空想することが好きだ。	.43
	25*	小説の中の出来事が、自分のことのように感じることはない。	.48

注1) No.は鈴木・木野(2008)に基づく

注2) *逆転項目

(3) QMEE

加藤・高木(1980)による日本版を使用した。「感情的暖かさ」10項目、「感情的冷淡さ」10項目、「感情的被影響性」5項目、7件法。第5回目調査にて実施。

(4) 自己意識尺度

菅原(1984)による日本語版を使用した。「私的自己意識」10項目、「公的自己意識」11項目、5件法。第1回目調査にて実施。

(5) 自己没入

坂本(1997)による自己フォーカスの強さと持続性の個人傾性を測定する尺度から「自己没入」11項目を使用した。5件法。第4回目調査にて実施。

(6) 自尊感情尺度

Rosenberg(1965)による自尊感情尺度の翻訳版(山本・松井・山成,1982)を使用した。10項目、5件法。第5回目調査にて実施。

(7) 個人志向性・社会志向性PN尺度

伊藤(1993,1995)の自己概念を形成する際の基準の方向性を測定する尺度を使用した。「肯定的な個人志向性」8項目、「肯定的な社会志向性」9項目、「否定的な個人志向性」6項目、「否定的な社会志向性」7項目、5件法。第4回目調査にて実施。

(8) 愛他行動尺度

Rushton, Chrisjohn, & Fekken(1981)の尺度(20項目)を菊池(1988)を参考に邦訳し、菊池の大学生版向社会的行動尺度から5項目を加え、表現を揃えるため改変した上で、25項目か

らなる愛他行動尺度を用意した。各行動について「経験頻度」および「(実際の経験に関係ない)精神的負担」をたずねた(5件法)。第3回目調査にて実施。

(9) Buss-Perry 攻撃性質問紙

安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井(1999)による日本版を使用した。「短気」5項目、「敵意」6項目、「身体的攻撃」6項目、「言語的攻撃」5項目、5件法。第3回目調査にて実施。

(10) 社会的スキル尺度

菊池(1988)による尺度を使用した。18項目、5件法。第2回目調査にて実施。

(11) 5因子性格検査

和田(1996)による尺度を使用した。「外向性」「神経症傾向」「開放性」「誠実性」「調和性」各12項目、5件法。第5回目調査として実施⁵。

(12) 社会的望ましき尺度

北村・鈴木(1986)による短縮版を使用した。10項目、2件法。第2回目調査にて実施。

結果と考察

MES10項目短縮版の各下位尺度得点は、選定した2項目の評定平均とした(表3)。また、他の尺度得点については、鈴木・木野(2008)と同様に、それぞれの尺度構成にしたがって算出した⁶。以下の分析ではこれらの得点を用いた⁷。

(1) MES10項目短縮版の各下位尺度得点の特徴

MES10項目短縮版の各下位尺度得点の代表値と散布度を表3に、ヒストグラムを図1に示す。いずれの下位尺度も歪度が負の値であることから、負の歪みを持つ分布といえる。尖度については、「自己指向的反応」「視点取得」「想像性」は0近くの値であったが、「他者指向的反応」は正の値、「被影響性」は負の値を示した。しかし、尖度と歪度についてはいずれも絶対値で1を越えることはなく、分布に関しては大きな問題がないものと考えられた。

MES10項目短縮版の各下位尺度得点の性差については、MES原版と同様に、「他者指向的反応」

⁵ MES実施から6か月後に回答を求めたが、5因子性格検査は比較的安定的な人格特性を測定するものと考えられるため、他の尺度と同様に分析に用いた。なお、両尺度に回答した者は135名であった。

⁶ ただし、愛他行動尺度の経験頻度の合計得点は、鈴木・木野(2008)と同様に、経験したことがない者が80%を越えた6項目を除いた19項目を用いて算出した。なお、社会的望ましき以外の尺度得点は合計得点を項目数で除算して算出した。得点可能範囲は1-5(QMEEのみ1-7)であった。社会的望ましきの尺度得点は全項目の合計点で、得点可能範囲は0-10であった。これらの尺度得点の分布は、鈴木・木野(2008)において特に大きな偏りがないことが確認されている。

⁷ 分析にはSPSS Statistics version 21を用いた。

表3 MES10項目短縮版の代表値、散布度、MES原版との相関、下位尺度間相関および再検査信頼性

	他者指向 的反応	自己指向 的反応	被影響性	視点取得	想像性
平均	3.87	3.87	3.17	3.39	3.58
標準偏差	(0.75)	(0.72)	(0.90)	(0.76)	(0.85)
歪度	-0.63	-0.48	-0.25	-0.23	-0.48
尖度	0.49	-0.10	-0.55	-0.08	-0.05
MES原版と10項目短縮版の相関	.86**	.85**	.87**	.80**	.85**
他者指向的反応	.56**				
自己指向的反応	.06	.56**			
被影響性	.10*	.19**	.64**		
視点取得	.26**	-.09*	-.09**	.56**	
想像性	.08	.11**	.15**	.04	.67**

注1) 各尺度得点は合計得点を項目数で除算して算出。得点可能範囲は1-5。

注2) ** $p < .001$, * $p < .01$ (鈴木・木野 (2008) と同様に、データ数の大きさ ($n=862-869$) を考慮し、1%水準以上で有意なものみに*を付した)

注3) 太字・下線の表記は6か月間隔の再検査信頼性係数 ($n=139-140$)

(以降、男性、女性の順に、 $M=3.78, 3.95$)、「被影響性」($M=3.07, 3.26$)、「想像性」($M=3.52, 3.63$)において、女性が男性よりも有意に高い得点を示し(順に、 $t = -3.17, -3.12, -2.00$, $p < .05$)、「自己指向的反応」($M=3.87, 3.88$)、「視点取得」($M=3.38, 3.39$)においては性差が見られなかった(順に、 $t = -0.13, -0.31, n.s.$)ことを確認した。

(2) MES原版と10項目短縮版の関連 (表3)

MES原版における下位尺度得点と10項目短縮版における下位尺度得点の相関係数を算出した。MES原版から10項目短縮版を提案するに際し、「自己指向的反応」を除く4下位尺度は各5項目から2項目ずつへ、「自己指向的反応」は4項目から2項目へと項目数を削減したが、MES原版における下位尺度得点と10項目短縮版における下位尺度得点は強い相関関係を保っており ($r = .80 \sim .87$)、10項目短縮版も原版同様に共感性の各側面を測定できるものと考えられる。

(3) 再検査信頼性 (表3)

MES10項目短縮版の各下位尺度得点の再検査信頼性について、第1回調査と第2回調査の両方に参加した回答者のデータを用いて、6か月間隔の縦断データの相関を求めたところ、 $r = .56 \sim .67$ であった。「他者指向的反応」、「自己指向的反応」、「視点取得」では $r = .56$ とやや低い値となったが、半年後の安定性としては許容範囲といえよう。

(4) MES10項目短縮版の下位尺度間の関連 (表3)

MES10項目短縮版の下位尺度間の相関は、他者指向性を測定する「他者指向的反応」と「視点取得」の間で正の相関 ($r = .26$) が見られ、原版とほぼ同様の関連を示した。しかし、それ

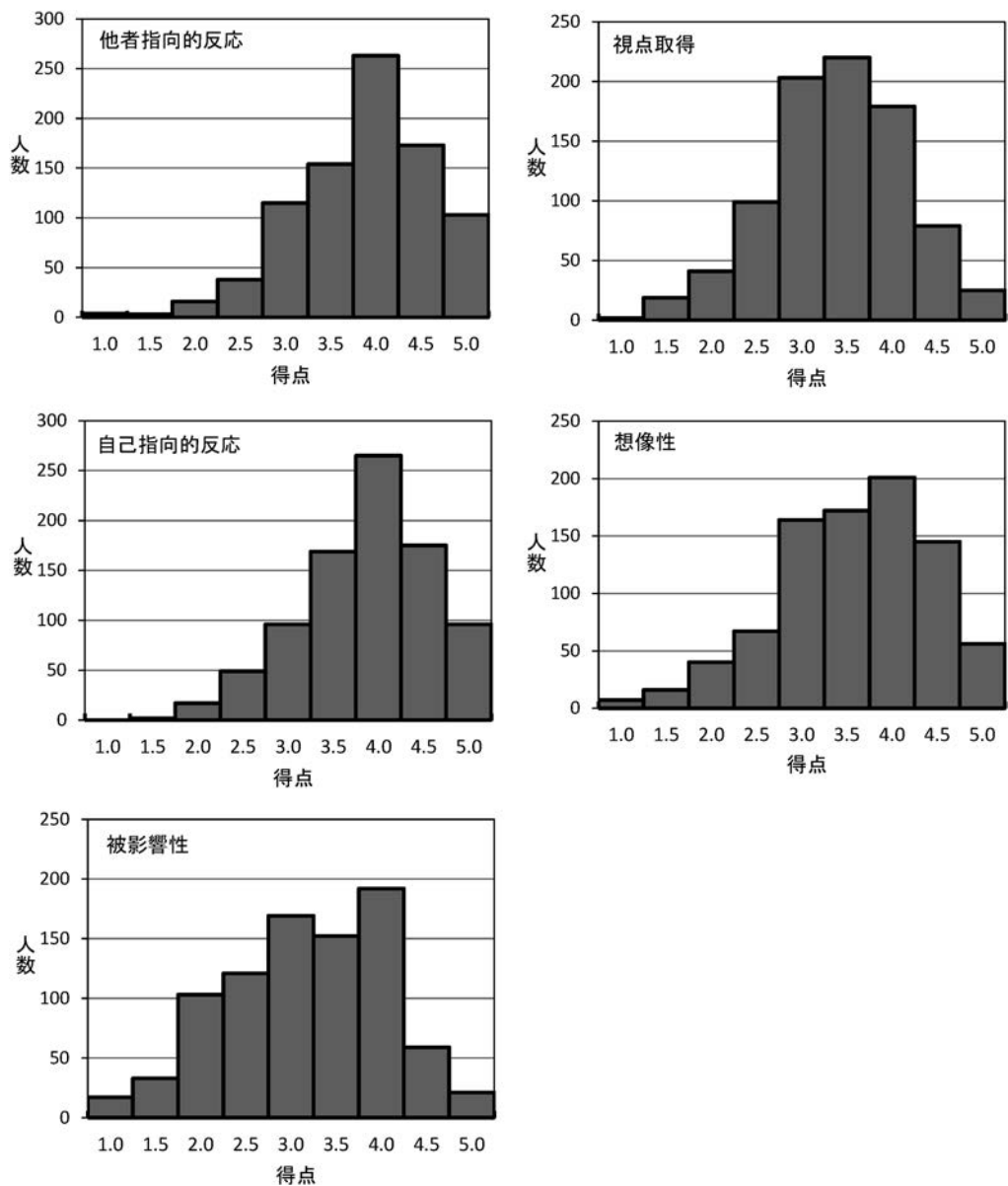


図1 MES10項目短縮版の各下位尺度の得点分布

以外については $|\cdot 20|$ 以下の値であり、ほとんど関連が見られなかった。異なる指向性の間ではほとんど関連が見られなかったことから、指向性の弁別が10項目短縮版においても確認できたといえよう。

なお、自己指向性を測定する「自己指向的反応」と「想像性」の関連については、MES原版では、弱い正の相関 ($r=0.21$) が見られたが、10項目短縮版ではごく弱い正の相関にとどまっ

た ($r=.11$)。後述する他の検討結果も踏まえて考えると、これは「想像性」というよりも「自己指向的反応」によるものではないかと考えられた。「自己指向的反応」の構成項目はもともと4項目間で自己指向的な感情反応に多様性を持たせるように設定されていたが、4項目から2項目に削減されたことにより、その多様性が若干狭まり（例えば、他者に起こった否定的出来事に対する安堵感などが除かれた）、認知面と感情面の関連が弱まった可能性が考えられた。

(5) 他の共感性尺度(IRI、QMEE)との関連 (表4)

情動面の下位尺度について、MES10項目短縮版の「他者指向的反応」は、IRI共感的配慮 ($r=.54$) およびQMEE感情的暖かさ ($r=.59$) と正の相関、QMEE感情的冷淡さ ($r=-.53$) と負の相関を示した。「他者指向的反応」は他の共感性尺度の対応する概念との間に、原版作成時に予想したとおりの関連を示したといえる。また、これらはMES原版での検討結果とも同等の結果であった。中心的な下位概念とされる「他者指向的反応」について併存的妥当性が確認できたといえよう。他方、「自己指向的反応」はIRI個人的苦痛との間に、弱い正の関連が予想されていたが、分析の結果、正の方向の関連ではあるがその強さは非常に弱く ($r=.17$)、MES原版よりも関連の強さが弱まったといえる。また「被影響性」はQMEE被影響性 ($r=.61$) との間、IRI個人的苦痛 ($r=.44$) との間に、MES原版と同様の正の関連が見られた。鈴木・木野 (2008) は、登張 (2003) や谷田・山岸 (2004) の知見も参照しながら、IRI個人的苦痛尺度の問題点の一つとして、この尺度が測定しているのは並行的所産であり被影響性に近い概念が測定されている可能性を示している。MES10項目短縮版の「被影響性」に関する結果も同様に理解されよう。

認知面に関しては、同じく多次元的アプローチをとるIRIの認知面の尺度との関連を検討した。MES10項目短縮版の「視点取得」はIRI視点取得 ($r=.54$) と、「想像性」はIRI想像性 ($r=.72$) と正の相関を示し、原版と同等の結果が得られた。

(6) 他の概念との関連 (表4)

自己意識尺度の公的自己意識については「自己指向的反応」 ($r=.41$) および「想像性」 ($r=.33$) との間に正の相関が見られ、私的自己意識については「想像性」 ($r=.25$) との間に同じく正の相関が見られた。しかし、私的自己意識と「自己指向的反応」の関連は無相関であった ($r=.07$)。また、当初の予想にはなかったが、私的自己意識と「他者指向的反応」 ($r=.28$) および「視点取得」 ($r=.24$) の間、公的自己意識と「他者指向的反応」 ($r=.26$) の間といったように、自己意識と他者指向性との関連も認められた。自己意識尺度は、IRIの検討 (Davis, 1983; Davis & Franzoi, 1991) において自己指向性を測る尺度として採用されていることから、MES原版の検討においても想像性や自己指向的反応と正の相関を予測していた。しかし、鈴木・木野 (2008) では、分析結果と先行研究の知見を踏まえ、自己意識が指向性弁別のための指標として適当であるのかについて疑問を呈している。MES10項目短縮版の指向性の弁別については、

表4 MES10項目短縮版と他の尺度との関連

	MES10項目短縮版					n
	他者指向 的反応	自己指向 的反応	被影響性	視点取得	想像性	
IRI (対人反応性指標)						
共感的配慮	.54**	.06	.15	.30**	.20*	164-165
個人的苦痛	.14	.17	.44**	-.09	.21*	164-165
視点取得	.26**	-.14	.02	.54**	-.06	166-167
想像性	.14	.04	.23*	-.05	.72**	163-164
QMEE (情動的共感性尺度)						
感情の暖かさ	.59**	.16*	.08	.14*	.12	341-342
感情の冷淡さ	-.53**	.04	-.11	-.14*	-.03	342-343
感情の被影響性	.22**	.24**	.61**	-.04	.14	343-344
自己意識尺度						
公的自己意識	.26**	.41**	.41**	.03	.33**	173-174
私的自己意識	.28**	.07	-.13	.24*	.25**	171-172
自己没入(没入尺度より)	.02	.21	.17	-.11	.42**	140-141
自尊感情尺度	.03	-.13	-.25**	.06	-.03	342-343
個人志向性・社会志向性PN尺度						
肯定的個人志向性	.17	-.18	-.36**	.05	.04	142-143
肯定的社会志向性	.53**	.05	.05	.18	.21	142-143
否定的個人志向性	-.07	-.02	-.32**	-.27*	.06	142-143
否定的社会志向性	.12	.25*	.50**	-.08	.08	143-144
愛他行動尺度						
経験頻度	.24*	-.07	-.08	.09	.09	162-163
精神的負担	-.32**	.17	.13	-.26**	.17	161-162
Buss-Perry 攻撃性質問紙						
身体的攻撃	-.14	.24*	.05	-.17	.19	166-167
言語的攻撃	.08	.15	-.37**	-.04	.02	166-167
短気	-.09	.28**	.24*	-.26**	.17	165-166
敵意	-.15	.32**	.17	-.10	.17	167-168
社会的スキル尺度	.21*	-.12	-.23**	.45**	-.08	207
5因子性格検査						
外向性	.35**	-.05	-.08	.08	-.08	134
神経症傾向	-.06	.13	.14	-.02	.06	130
開放性	.09	-.05	-.27*	.00	-.11	134
誠実性	.07	.06	-.01	.14	-.20	133
調和性	.25*	-.11	.15	.12	-.07	135
社会的望ましさ尺度	.14	-.16	-.06	.23*	-.16	206

注1) ** $p < .001$, * $p < .01$ (鈴木・木野 (2008) と同様に、データ数の大きさを考慮し、1%水準以上で有意なものに*を付した)

自己意識以外の概念との関連において引き続き検討するが、以上に記したMES10項目短縮版の結果は、MES原版とほぼ同様の関連であることが確認された。

自己没入尺度は、自己指向性の観点から検討に加えられた。MES原版と同様にMES10項目短縮版においても、「自己指向的反応」($r=.21$) および「想像性」($r=.42$) との間に、当初の予想どおりの正の相関が見られた。

自尊感情尺度については、「他者指向的反応」とは無相関 ($r=.03$)、「被影響性」とは負の相関 ($r=-.25$) を示し、鈴木・木野(2008)の予測および結果と一致する結果であった。また、「視点取得」とは無相関 ($r=.06$) であり、MES原版同様、予想とは異なり正の関連が見られなかった。

個人志向性・社会志向性PN尺度については、他者指向性の観点から関連が予想された肯定的社会志向性と「他者指向的反応」($r=.53$) の間に予想どおりの関連が見られた。これはMES原版での分析結果とも対応している。しかし、同様に正の関連が予想された「視点取得」($r=.18$)との間の関連は正の方向ではあったがごく弱いものであった。MES原版では $r=.26$ と弱い正の相関が見られていたが、その関連が弱まった。また、「被影響性」は、同調・他律的な在り方を捉える否定的社会志向性 ($r=.50$) と正の、自己実現を終局とする肯定的個人志向性 ($r=-.36$) や自分中心的な在り方を捉える否定的個人志向性 ($r=-.32$) と負の相関を示した。負の関連の強さはやや弱まったものの、MES原版と同様の結果が確認された。

愛他行動および攻撃性といった行動的側面との関連については、他者指向性の観点からは、「他者指向的反応」と「視点取得」は、愛他行動の経験頻度と正の、愛他行動の精神的負担および攻撃性と負の相関関係があると予想されていた。本稿の結果では、経験頻度と「他者指向的反応」の間に正の相関が見られ ($r=.24$)、「視点取得」との間には関連が見られなかった ($r=.09$)。ただしこれらはMES原版とほぼ同様の結果である。また精神的負担との関連については、予想通り負の関連が示された(順に、 $r=-.32$, $-.26$)。攻撃性との関連については、情動的側面である短気と「視点取得」の間に負の相関 ($r=-.26$) が見られたのみで、他の3下位尺度と他者指向性との間にはほとんど関連が見られなかった。MES原版の分析においても予想したような関連が愛他性および攻撃性の全ての下位尺度について明確に見られたわけではないが、MES10項目短縮版では原版で見られた関連の強さが若干弱くなる傾向にあったといえる。

他方、自己指向性の観点からは、「自己指向的反応」および「想像性」とは、愛他行動の精神的負担と正に相関すると予想されており、MES原版ではおおむね一致する方向の結果を得ていた。10項目短縮版では、関連の方向には変わりなかったが、関連の強さが多少弱まった(いずれも $r=.17$)。また、精神的負担を感じつつも利己的な理由により実際に援助行動をとる者が存在する(Batson, O'Quin, Vanderplas, & Isen, 1983) ことから、愛他行動の経験頻度とは関

連しないと予想されており、10項目短縮版でもこれが確認できた(順に、 $r = -.07, .09$)。攻撃性との関連については、敵意と「自己指向的反応」の間に正の相関が予想されており、本稿の分析結果からもこれが確認された($r = .32$)。

また、「被影響性」については、QMEEの感情的被影響性における先行研究の結果から、愛他行動との間に無相関が予想されており、分析結果からもこれが確認された(経験頻度で $r = -.08$, 精神的負担で $r = .13$)。攻撃性との関連については、対立場面における強い自己主張を測定する項目からなる言語的攻撃と負に相関すると予想され、分析結果からもこれが確認された($r = -.37$)。

社会的スキルとの関連については、「視点取得」は社会的スキルを発揮するために必要な能力であると考えられることから正の相関が、また、「被影響性」とは項目内容から負の相関が予想され、原版による検討結果においても、これらが確認されていた。10項目短縮版においても同様の結果が得られた(順に、 $r = .45, -.23$)。

5因子性格検査については、外向性と調和性において「他者指向的反応」と正の関連が見られた(順に、 $r = .35, .25$)。これらの側面は他の人格検査に含まれる共感性と関連する(Shafer, 1999; 和田, 1996)ことから、MES原版においても正の相関が予想・確認されており、これと一致する結果が得られた。また、MES原版において「被影響性」は、項目内容から神経症傾向との間に正の相関が予想・確認されていた。10項目短縮版においては、予想と一致する方向の関連を示したものの、その関連の強さは $r = .14$ とごく弱いものであった。

社会的望ましさについては、「他者指向的反応」や「視点取得」とは関連しないことが望まれたが、MES原版同様、「視点取得」においては正の関連が見られた($r = .23$)。これに関しては、鈴木・木野(2008)でも議論されているとおり、社会的望ましさ尺度が、本当に社会的に望ましいとされる人格特性(例えば、対人関係における如才のなさ)を測定している部分がある(Riggio, 1986)ことが考えられるだろう。社会的に望ましい方向への回答の歪みの可能性の確認は、MES原版同様に、今後の検討課題である。

結 語

本研究は、MESの10項目短縮版を提案し、その信頼性と妥当性を確認することであった。MES10項目短縮版の項目選定にあたっては、構成概念の広がりや損なわないように配慮した。こうして提案された10項目短縮版についての分析の結果、各下位尺度得点の分布には大きな問題はないことを確認した。また、再検査信頼性の結果からは、MES原版よりも低いものもあったが一定の再現性が見られ、6か月間隔の結果としては許容範囲と判断された。

MES10項目短縮版での下位尺度間の関連や、他の共感性尺度との関連、他の概念との関連に関しても、おおむね鈴木・木野（2008）で尺度作成時に理論的に想定された方向の関連が見られ、また、一部予想と異なる結果については、MES原版における分析結果と大きく異なるものではないことから、妥当性に関しても大きな問題はないと考えられた。下位概念別にMES原版による分析結果も踏まえて見ていくと、共感性の中心的な下位概念である「他者指向的反応」においては特に、MES10項目短縮版とMES原版の結果は酷似しており、代替可能性が高いといえよう。「被影響性」「視点取得」「想像性」については、他の概念との関連がごく弱いものとなることも一部ではあったが、他の共感性尺度との関連も踏まえて考えると、代替可能なものと判断された。ただし、「自己指向的反応」においては、MES原版と10項目短縮版の関連は他の下位概念と同様に強いものであったが、10項目短縮版における下位概念間の関連や他の共感性尺度との予想された関連はごく弱いものにとどまった。MES原版では弱い関連が見られていたが、その関連が弱まったといえる。他の概念との関連についても、一部で同様の傾向が見られた。これは前述のとおり、項目を削除したことにより、測定される感情反応の幅が狭まったためではないだろうか。したがって、「自己指向的反応」の短縮版使用に際しては、選択されなかった項目も参照しながら、測定に用いた項目内容を十分に把握して、結果の解釈が行われるべきであろう。

以上から総合的に判断すると、MES10項目短縮版は原版を著しく損なうものではなく、利用目的によっては、少数項目であるがゆえの弱点に配慮しながら代替利用が可能なものであると考えられる。石井（2014）でも述べられているように、尺度作成に際して、より少ない項目で済むのであれば、最初から適切な項目数の尺度を作成すべきであり、その意味では共感性を多次元的に測定するには、24項目からなるMES原版の利用が最も望ましい。ただし、測定の現場においては、幅広い世代に対して実施したい場合や、WEB調査を行う場合、全体の調査内容のボリュームが問題になる場合、繰り返し同じ対象に質問を行う場合など、より簡便な尺度が求められることもある（小塩, 2015）。即時フィードバックを行いたい場合や、簡便な自己チェック指標として使用したい場合などもあろう。これらのような場合には、MES10項目短縮版は有益な提案となろう。

引用文献

- 明田芳久（1999）. 共感の枠組みと測度：Davisの共感組織モデルと多次元共感性尺度（IRI-J）の予備的検討 上智大学心理学年報, **23**, 19-31.
- 秋政邦江・中山芳一・伊藤智里（2009）. 保育者の共感性向上のためのカリキュラム開発 —絵本を教材とした共感意欲向上カリキュラムを中心に— 川崎医療短期大学紀要, **29**, 43-48.
- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子（1999）. 日本版Buss-Perry攻撃性質問紙（BAQ）の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392.

- Batson, C. D., O'Quin, K., Fultz, J., Vanderplas, M., & Isen, A. M. (1983). Influence of self-reported distress and empathy on egoistic versus altruistic motivation to help. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 706-718.
- Davis, M. H. (1980). A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, **10**, 85.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.
- Davis, M. H. (1994). *Empathy: A social psychological approach*. Madison, WI: Brown & Benchmark. (菊池章夫(訳)(1999). 共感の社会心理学 川島書店)
- Davis, M. H., & Franzoi, S. L. (1991). Stability and change in adolescent self-consciousness and empathy. *Journal of Research in Personality*, **25**, 70-87.
- Eisenberg, N., & Miller, P. A. (1987). The relation of empathy to prosocial and related behaviors. *Psychological Bulletin*, **101**, 91-119.
- Eisenberg, N., & Strayer, J. (Eds.) (1987). *Empathy and its development*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 藤村和久 (2010). 保育士, 幼稚園教諭を目指す学生のための保育者適性尺度の構成 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, **9**, 129-143.
- 石井秀宗 (2014). 本邦における測定・評価研究の動向—構成概念を精確に測定することの重要性の再認識を目指して— 教育心理学年報, **53**, 70-82.
- 伊藤美奈子 (1993). 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **64**, 115-122.
- 伊藤美奈子 (1995). 個人志向性・社会志向性PN尺度の作成とその検討 心理臨床学研究, **13**, 39-47.
- 加藤栞・沢佳夏子・下瀬寛子・山下千尋・雑賀倫子・吉岡伸一 (2013). 看護学生の社会的スキルと共感性の学年間比較に関する検討 米子医学雑誌, **64**, 78-86.
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, **2**, 33-42.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル— 川島書店
- 木野和代・鈴木有美・内田千春 (2011). 対人援助職における共感性(1)—保育者を目指す学生の特徴と共感疲労の関連— 日本心理学会第75回大会発表論文集, 906.
- 木野和代・内田千春・鈴木有美 (2015). 保育者の共感性と感情労働の関連— 保育者養成課程における実習経験の振り返りから— 日本社会心理学会第56回大会発表論文集, 281.
- 北村俊則・鈴木忠治 (1986). 日本語版Social Desirability Scaleについて 社会精神医学, **9**, 173-180.
- Mehrabian, A., & Epstein, N. (1972). A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, **40**, 525-543.
- 三木澄代 (2015). 保育者養成のための実習と大学生の共感性に関する一考察 環太平洋大学研究紀要, **9**, 15-20.
- Miller, P. A., & Eisenberg, N. (1988). The relation of empathy to aggressive and externalizing/antisocial behavior. *Psychological Bulletin*, **103**, 324-344.
- 宗田直子・岡本祐子 (2013). アイデンティティにおける「個」と「関係性」をとらえる尺度作成とその短縮版の検討 青年心理学研究, **25**, 13-27.
- 西村多久磨・村上達也・櫻井茂男 (2015). 共感性を高める教育的介入プログラム—介護福祉系の専門学校生を対象とした効果検証— 教育心理学研究, **63**, 453-466.
- 小塩真司 (2015). 心理テストは信用できるのか 心理学ワールド, **68**, 13-16.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ビノ (2012). 日本語版Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)作成の試み パーソナリティ研究, **21**, 40-52.
- Riggio, R. E. (1986). Assessment of basic social skills. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 649-660.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Rushton, J. P., Chrisjohn, R. D., & Fekken, G. C. (1981). The altruistic personality and the Self-Report Altruism Scale. *Personality and Individual Differences*, **2**, 293-302.

- 坂本真士 (1997). 自己注目と抑うつ の社会心理学 東京大学出版会
- 桜井茂男 (1988). 大学生における共感と援助行動の関係 —多次元共感測定尺度を用いて— 奈良教育大学紀要(人文・社会), **37**, 149-154.
- Shafer, A. B. (1999). Factor analyses of Big Five Markers with the Comrey Personality Scales and the Howarth Personality Tests. *Personality and Individual Differences*, **26**, 857-872.
- 菅原健介 (1984). 自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
- 杉山由香里・比嘉勇人・田中いづみ・山田恵子 (2015). 看護師の援助的コミュニケーションスキルと私的スピリチュアリティおよび共感性の関連 富山大学看護学会誌, **15**, 17-27.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度(MES)の作成 —自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて— 教育心理学研究, **56**, 487-497.
- 鈴木有美・木野和代 (2015). 社会的スキルおよび共感反応の指向性からみた大学生のウェルビーイング 実験社会心理学研究, **54**, 125-133.
- 鈴木有美・木野和代・出口智子・遠山孝司・出口拓彦・伊田勝憲・大谷福子・谷口ゆき・野田勝子 (2000). 多次元共感性尺度作成の試み 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), **47**, 269-279.
- 鈴木有美・木野和代・内田千春 (2011). 対人援助職における共感性(2) —保育者養成課程に在籍する学生の変化— 日本心理学会第75回大会発表論文集, 907.
- 谷田林士・山岸俊男 (2004). 共感が社会的交換場面における行動予測の正確さに及ぼす効果 心理学研究, **74**, 512-520.
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達：多次元視点による検討 発達心理学研究, **14**, 136-148.
- 内田千春 (2016). 保育者の共感性と感情労働(2) —初任期経験の認識と専門性の発達— 日本保育学会第69回大会発表要旨集, 1016.
- 内田千春・木野和代・鈴木有美 (2014). 対人援助職における共感性(6) —縦断的变化と保育者養成課程での経験の関連— 日本発達心理学会第25回大会発表論文集, 618.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成 心理学研究, **67**, 61-67.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

(2016年10月11日受領、2016年11月7日受理)

(Received October 11, 2016; Accepted November 7, 2016)

Development of a short form of the Multidimensional Empathy Scale (MES-SF).

Kazuyo KINO

Yumi SUZUKI

The purpose of this study was to examine the reliability and validity of a 10-item Multidimensional Empathy Scale-Short Form (MES-SF), which consisted of the five subscales (i.e. Other-Oriented Emotional Reactivity, Self-Oriented Emotional Reactivity, Emotional Susceptibility, Perspective Taking, and Fantasy). In the item selection, we emphasized content validity and allotted 2 items for each subscale. For the analysis of reliability and validity, data from 871 undergraduates was used. The results of test-retest correlations were adequate at a six-month interval. In addition, the results in a series of validation studies showed almost predictable patterns of relationships with the existing scales and other hypothetically related indices. Therefore the MES-SF was generally considered to represent a reliable and valid alternative to the original scale. A few precautions for use of the MES-SF were discussed.